

若者の「公共性」形成に関する一考察

—— 地元のまちづくり団体で活動する若者の事例分析を通して ——

松 山 礼 華

1. はじめに

近年の若者論において、若者の人間関係は「親密性」を軸に、個々の異質性を顕在化させず、同質的な側面につながろうとする志向を有していることが指摘されている。そして、そのような若者たちの意味世界は、自分たちの親密な関係以外の事象に関心を示さず、私的世界での欲求充足や関係形成を追求する私事化したものであることも指摘されている（土井2006・新谷2010・古市2011）。

親密性を軸とした若者の人間関係が展開される場として、若者論でしばしば挙げられるのが「地元」である。浅野は内閣府が実施する世界青年意識調査において、「現在住んでいる地域が好き・まあ好き」と応える若者が1977年から2008年まで一貫して上昇していること、その理由を「友人がいるから」とする若者が最も多いことを挙げ、『「地元志向」とはつまるところ「友人志向」ではないかと思えてくる（浅野2011：16）』と述べている。

土井はこうした状況に関して、「昨今の若者たちが地元志向を強めているのは（略）いわば存在論的な不安を抱えているからである。（略）見知った狭い人間関係の中で誰からも傷つけられず、また誰かを傷つけることもなく、自分らしさを失わずに地道にいきていこうとしても不思議ではない。（土井2010：107）」と述べ、地元における若者の人間関係の内閉的・関係依存的な側面を批判的に考察している（土井2006）。一方、鈴木は、若者が自身の出身地や友人とよくつるんで遊ぶ街を「ジモト」と呼ぶ感覚に注目し、『自分を受け入れてくれる人間関係の中で生きられることによって可能になるジモトは（略）、酷薄な競争を強いる外の世界に対して挑戦するための足場であり、そこで敗れた時にも自分を迎え入れてくれる「帰るべき場所」である』と述べ、「癒しのシェルター」としてのジモトにおける人間関係の肯定的な側面を考察している（鈴木2008：211-212）。

土井と鈴木が地元（あるいはジモト）における若者の人間関係の評価は異なっているが、地元を「存在論的な安心感を得られる親密な空間」として捉える基本的視座は共有されている。そして、このような視座は2000年代までの若者論に広く共有されているものがある。

しかし2010年前後から、若者にとっての「地元」は多様性に開かれ、公共性を

持つステージになり得るという主張がみられるようになる。たとえば浅野は、さまざまなサブカルチャーが地元を基盤として花開いていること、サブカルチャーを通じた若者の人間関係（趣味集団）に公共性が形成される可能性があることを示唆している（浅野2011）。また阿部は1980年代から2010年代までのJ-POPの内容分析を行い、2000年代からJ-POPの歌詞に登場する「地元」という概念が、2010年代には公共性を帯びた意味づけを獲得していくことを明らかにした上で、若者たちが「地元を開く新しい公共性」の担い手になっていくことに期待を寄せている（阿部2013）。

浅野および阿部の考察は、これまで親密圏として捉えられてきた地元を公共性が形成されるステージとして位置づけようとするものであり、若者と地元の研究に新たな地平を切り開いている。そこで本稿では、浅野と阿部による「公共性」概念の内実を検討した上で、両者が未だ掘りあげられていない側面——すなわち若者自身が地域活動への参加を通して「公共性」をどのようなものとして意味づけ、どのようなプロセスを通して関わっていくのか、またそれは経年的にどのような変化していくのかという、個人のおかれた社会的文脈と意味世界に関わる側面——を千葉県柏市のまちづくり団体で活動する若者へのインタビューを通して描き出すことを試みる。

2. 本稿の課題

浅野と阿部は共に、水準の異なる二つの観点から「公共性」概念を提示している。

一つは、人々の個別の関係性を越えたマクロな社会構造の水準における「公共性」である。両者はこの水準の公共性概念として「新しい公共」を挙げている。「新しい公共」とは、公共性の内容や供給方法を国が一方的に決めるのではなく、多様な主体が創案し担っていかなければ現代社会の問題を解決することはできない、という時代認識の拡がり背景として（田中2010）、2000年代以降クローズアップされてきた言表である。2010年に民主党政権のもとで開催された「新しい公共」円卓会議が、「新しい公共宣言」を行ったことにより広く一般に浸透するようになった。

阿部は、円卓会議が定義した「新しい公共」——人々の支え合いと活気のある社会。それをつくることに向けたさまざまな当事者の自発的な協働の場——を形成していく現代的意義は大きいと述べる（阿部2013：172）。また浅野は「人々の生活を下支えする役割から国家や企業が手を引き始め、家族もまたその負担に耐えられなくなりつつある現在、それらのいずれでもないような協力と連帯の仕組みが求められている」と述べ、そのような協力と連帯の仕組みを「新しい公共」と位置づけている（浅野2011：3）。

また、市民活動と行政との協働という観点から「新しい公共」を考察する滝澤

は、公共性概念について『ある活動の成果が、単に特定の個人や少数の人間の利益に還元されるような場合にそれを「公共性」をもつ活動とは誰しも考えないように、公共性には誰か特定の集団だけが利益を占有したり、特定の個人だけが負担を強いられたりするようなことがない「利益と負担の非特定性」が基本的要件となる。もう一点の重要な視点は、公開性と接近への非制限性である。活動の過程や利益の発生と帰属、およびそれへの参加に対して特定の制限がないことが公共性の構成要件として重要である（滝澤2006：5）』と述べる。

三者の論考からは、当事者たちだけで利得を独占することのできない公共財（浅野2011：40-41）を創出する共同体が、開放的・多元的に併存する社会のあり様が想起される。「新しい公共」はそうした社会のあり様を志向する概念として捉えることができよう。

浅野・阿部が提示する二つ目の公共性は、個々人のコミュニケーション様式に照準した「公共性」である。浅野は「親しい関係を超えて、問題の解決に利害や関心をもつという以外の共通点が必ずしもない人々の間に協力関係を組織していくようなつきあい方の作法を公共性と呼んでおこう（傍線は筆者）」と述べている（浅野2011：10-11）。

また阿部（2013）は上述のJ-POPの歌詞分析において、2000年代の「地元」は、気の合う仲間たちと全能感を享受する場所として位置づけられていたが、2010年代には、異化作用によって仲間たちを変えていこうとする場所、他人ぶつかり合いながら自分たちを高め、社会へと自らを開いていく場所へと変化していると述べ、2010年代を「ポスト地元の時代」と位置づけている。そして「人それぞれ違ってだからこそぶつかって…（ONE OKROCK『未完成交響曲』）」という歌詞等に注目した上で『地元によく「公共」が戻ってきたとも言える（阿部2013：160）』とし、「地元を開く新しい公共性（阿部2013：159）」に期待する視座は、異質な他者と関係を取り結ぶコミュニケーション様式を公共性と指定する浅野と共通している。

浅野・阿部の両者は、「異質な他者と関係を取り結ぶ」というコミュニケーション様式の積み重ねが「新たな公共」という社会的次元の公共性の構築につながるという論理構成を前提としており、そのプロセスが地元をステージとした集団から展開されることに期待を寄せている。しかし両者は、それぞれの調査方法に由来する限界を抱えている。

まず阿部は、J-POPの歌詞分析を通して人々のコミュニケーション様式の水準から「公共性」を考察しているが、それと「新しい公共性」との具体的関連は分析主題に据えられていない。『「新しい公共」において必要とされるのが、「ポスト地元の時代」のアーティストたちの姿勢である（阿部2013：174）』と両者の関連性を強調しているが、考察対象は、異質な他者とのコミュニケーションチャンネルを有するギャルに関すること等、J-POPの歌詞分析と同水準の事象に限られている。

浅野は、大学のサークルで同人誌を製作するオタクたちを描いた漫画の内容分析を行っている。このなかで浅野は、同人誌の製作過程でメンバー間の考え方の違いが顕在化するも、彼らに共有されている“趣味への愛着”が共同性維持の求心力となって互いの異質性を乗り越えていくプロセスに着目し、そうしたコミュニケーション様式のなかに「公共性」を見出している（浅野2011：51-54）。しかし浅野も、メンバーが取り結ぶ社会関係が団体の外に広がり、彼らが「新しい公共」という社会的仕組みを拡大・深化させていくプロセスまでは考察していない。

また浅野は、趣味集団に所属するメンバーが一様に持つ趣味への強い愛着が、異質性の高い集団においても活動を続けていくインセンティブとなっていることを想定しているが、若者が趣味活動に関連する集団へ参加し、活動を継続させていく背景には、趣味への愛着だけに還元できない多様なインセンティブが存在するものと考えられる。

さらに浅野は、「趣味集団への参加」や「多面的な集団所属」を成し得ている若者は、そうでない若者と比べて政治参加行動（デモへの参加・マスコミへの投書・署名・寄付等）や政治的会話の頻度が高いという統計データを示し、集団内で醸成される（であろう）上記のコミュニケーション様式が、マクロな社会的次元の「公共性」への関与を促進していくことを示唆しているものの、それが達成されていくプロセスや当人の意味づけの推移を、個々人の生活世界に即して浮かび上がらせてはいない。

若者にとっての「地元」を「公共性」が形成されるステージとして位置づけ、その実現可能性を考察していくためには、

- ・若者がどのような経緯で地元の集団に関わるようになるのか、
- ・集団内でどのような相互作用を展開し、他者の異質性とどのように向き合っていくのか
- ・どのような経緯で集団外の社会関係へと関わりを広げていくのか、
- ・どのような経緯で、不特定多数の人々が利益を享受する「公共財」の形成を意識していくのか

をJ-POPや漫画等の二次資料ではなく、彼らの実際の生活世界に即して丹念に描いてく経験的アプローチが求められよう。本稿はそのための一つの試みである。

3. フィールド概要

本稿では、筆者が2010年からフィールドワークを続けている千葉県柏市のまちづくり団体ストリート・ブレイカーズ（以下、ストブレ）のメンバーDの活動軌跡に焦点を当てていく。それに先立ち本節では、ストブレの活動テーマである「中心市街地活性化」が全国的に求められるようになった背景と、ストブレの組織概要を述べ、Dの活動の背景にある社会的・組織的文脈を提示する。

(1) 求められる「中心市街地活性化」

小売業や行政機関等が集積し街の中核としての機能を担っていた各地の中心市街地は、大型ロードサイドショップの台頭、消費構造の変化など複合的な要因により衰退傾向にある。都市論の領域からは、中心市街地がもつ生活空間としての利便性や、人々が交流する地域コミュニティの結節点としての機能が縮小していくことへの懸念が表明されている（石原2006、宗田2007、濱田2011）。各自治体や地域の小売業は、中心市街地の地価下落や経済悪化を食い止めるため、商業集積地全体としての魅力と賑わい維持に向けた施策に取り組まざるを得ない状況にある。なかでも、買い物より交流を志向する消費者ニーズを捉えた街並み整備やイベント開催を行い、当該エリアに統一された空間的意味を付与していく取り組みは、活性化に向けた主要な方法論として各地で検討が進められている。

柏市でも「商業の活性化、まちなかの回避性の向上、まちなかの魅力の向上」という目標の下、平成20年に中心市街地活性化基本計画が策定され、ストブレは当計画の「柏駅周辺活性化イベント事業」の担い手として位置づけられている²。

本稿では、ストブレメンバー達が、それぞれの解釈枠組みを通じて「中心市街地活性化」という団体の活動テーマを意義づけ、その達成に向け、団体内外で「つきあい（つきあい方）の作法」としての公共性を発揮していくものと捉える。また柏の街では「中心市街地活性化」という公共財の形成に向け、市内の様々な社会的アクターが協働（新しい公共の構築）しているものと捉える。そして、双方のプロセスをDの活動を通して考察していく。

(2) ストブレの活動概要

ストブレは「若者と街の接点づくり」を通じて中心市街地の活性化を目指すまちづくり団体で、柏駅前エリアの中心市街地に賑わいをもたらすイベントの開催を主事業とした活動を展開している。30名程度の現メンバーのうち、市内在住の20～30代の勤労者が最も多くを占めている。

ストブレ活動の独自性は、柏市中心市街地に「若者の街」という空間的意味を付与する中心的役割を果たしたことが挙げられる。柏市中心市街地は、千葉県北西部を代表する中核的商業都市としての発展を遂げているが、「東京のベッドタウン」として以上のイメージを発信することができず、地域の人々に愛着をもって語られることは少ない状況にあった。そのような状況下、ストブレは音楽・ファッション・フードを軸としたイベント開催とパブリシティ活動を精力的に行い、「若者の街」という空間的意味づけの確立に寄与していく。その活動を通して、来訪者の回遊性や滞在時間の増大、若者世代の交流の場の提供、イベント関係者のネットワーク形成等を実現させていった点に、中心市街地活性化に向けたストブレの存在意義を見出すことができる。

2005年より、単年度プログラム「柏マイスター塾」³を通して、新メンバーの募集と育成を行っている。2015年現在は、地元ミュージシャンの野外ライブステア

ジ「音街かしわ」、手づくりの雑貨やフードを制作者自身が販売する「手づくりの市」、若手農家による「ジモトワカゾー野菜市」、新メンバーの発掘・育成を行う「柏マイスター塾」の開催等をそれぞれの部会に分かれて行っている。音楽、ファッション、ショッピング、アートデザインなど若者の趣味とつながる多様な活動機会の提供により様々な動機をもつ若者の参加を可能にしている点において、浅野の言う趣味集団とも親和性の高い団体としても捉えることができる。

ストブレは1998年に柏商工会議所青年部20周年の単年度企画として立ち上げられた後、2000年に柏駅周辺の民間団体が連携する「柏駅周辺イメージアップ推進協議会（以下、推進協議会）」に母体を移行させて活動を再開した経緯を持つ。以後2014年までの間、推進協議会の下部組織（イベント部）として事業に着手してきた。この間の活動資金は、推進協議会およびその担当課である柏市商工課から充当されている。筆者がフィールドワークを始めた2010年から2014年までの間、ストブレはこれまでの活動実績を背景に、推進協議会と柏市商工課に対する高い自律性を保持し、両者から中心市街地活性化に向けたイベント事業を一任されている状況にあった。

2015年、ストブレの置かれた外部環境は大きな節目を迎える。推進協議会の解散に伴い、ストブレは独立した市民活動団体となり、事業の推進は柏エリアマネジメント協議会の連携事業として予算を分配されて行うことになったのである。予算申請は、柏駅周辺で活動する市民団体全体に開かれているため、予算配分を希望する団体はコンペティションを通してエリアマネジメント協議会から選考される必要がある。着実な活動実績を背景に、これまで競合団体がいない環境で安定的に事業を展開してきたストブレは、予算申請時だけでなく、事業の受託後にも、活動の方向性や予算の用途等について、エリアマネジメント協議会や、事業実施の際に連携していくことが求められている柏市まちづくり公社と、頻繁に交渉・協議していくことが必要な状況におかれるようになった。

詳述は次節とするが、Dは新代表と共に柏市まちづくり公社との交渉・協議に継続的に関わっていくようになる。2000年代以降、全国では「官民協働」の仕組みが模索されるようになり、多くの地方自治体や公共企業体は委託・補助・共催・指定管理等を通して公的事業への市民参加を促進させている。こうした体制下において、事業に関わる諸アクターは、様々な局面で互いの利害や志向性の違いに直面し、協議・交渉していく必要に迫られている。Dはそうした協議・交渉のプロセスの担い手となっていくのである。

4. 調査概要

本稿で焦点を充てるD（女性現在30代半ば）は、大卒後、東京の芸能事務所に所属しアナウンサーの仕事をしていたが、その後事務所を辞め、フリーアナウンサーとして柏を拠点とした活動を始める。ストブレには2007年から参加するよ

うになり、2009年からは「音街部会」の部会長を務めるようになる。音街部会は、駅前広場（通称ダブルデッキ）で、地元のストリートやライブハウスで活動するミュージシャンが出演する野外ステージ「音街かしわ」の開催を主事業とする部会である。

ストブレへの参加を通してDは、地元の多様な人々と事業の実現に向けたコミュニケーションを展開させていく。筆者は2015年にDへのインタビューを2度行い、彼女のネットワークの変容過程、展開されるコミュニケーションのあり様、それらに対する本人の意味づけの把握に努めた。以下の5節は、Dがストブレに入り地元で社会関係を広げていくプロセスと、そこで展開される相互作用のあり様を描いていく。続く第6節は「中心市街地活性化」というストブレが創出する公共財に対する彼女の意味づけのあり様とその変遷を描く。どちらも彼女自身の語りをもとに再構成したものである。

5. 活動の軌跡

(1) ストブレとの出会い

2006年、ストブレは地元ミュージシャンの作品をリリースする地域密着型音楽レーベル「柏兄弟」を立ち上げる。フリーランスでアナウンサーをしていたDは知り合いからの声かけで、レーベル立ち上げの記者発表の司会を務めることになる。「たぶんその（記者発表の）打ち上げで聞いたんだよね。ストブレって団体があって入らない？みたいな話があって。けどもう全く知らないし、別にあんまり興味もなく、でもなんか言われるがままみたいな感じで、第三期の柏マイスター塾に入って」という語りからも伺えるように、彼女のストブレへの参加は主体的な動機づけによってなされたわけではなかった。「まずあの空気が最初合わなかった。私はけっこうずっと都内に出てたから、なんだこの人たちみたいな、地元で集まっちゃって、みたいな。ちょっと変なところに来ちゃったっていう。すごい覚える」。

そんな彼女が参加を断らずに活動を続けることしたのは「地元に基づいて仕事をしていきたい」という自身のキャリアプランにつながると思ったこと、そして「自分で何かイベントとかできるのが楽しそうだなってちょっと思った」ことにある。上述のようにストブレの新メンバーは参加初年度「柏マイスター塾」の受講生となり、年度末の発表会でまちづくり企画を提案する。Dも同期のメンバーたちと街歩きイベント（住民が市内の川沿いをウォーキングし、到着先の公園でランチや地元ミュージシャンたちの演奏を楽しむというもの）の企画を練り上げていく。このプロセスを通じてDは、参加初年度からストブレに「ハマって」いったという。その要因の一つに、彼女の学卒後のライフストーリーがある。「大学出たから東京の事務所に入ったんだけど、やり始めたらすごく違和感を感じて。なんかこう居心地が悪いというか。当たり前なんだけど周りはみんな知らない人

で、ほんと仕事だけの付き合いで。一か月後にまた収録だったら、その間、他の人が何してるか全然分かんないの。で、これをやりますって全部準備できてる現場にポッと行ってポッと帰るみたいな。なんかそこで初めて違和感を感じて。やっぱりもうちょっと柏に密着したいなって。私、中学から私立に通っているから地元で友達があんまりいなかったんだけど、それが大人になってからすごい寂しかったのね。働き始めると毎日誰かに会うことなくなるじゃん。そういうのもあったし…地元に戻るっていうかさ。この街で、生活入れ替えて、ご飯食べて寝る生活だけじゃなくて、地元を目を向けて何かできないかなって思ったんだね。外に出て初めて感じたのかな。」

東京の事務所に所属していた頃の働き方を彼女はこう振り返る。

「会社に所属してたわけじゃないから自分でどうにもなるっていうか、自分次第っていうところがずっとあった。会社でノルマがあったり、何時までやりなさいとか、学校で宿題出されるみたいなことがなかったから、ずっと」。

これらの語りからは、東京の事務所で働いていた期間の彼女が「帰属の弱さ(樋口2006)」を感じ続けてきたことが分かる。樋口は現在の若者が抱える「帰属の弱さ」には、職場への帰属・社会制度への帰属・人々(社会関係)への帰属という三つの側面があるとしているが、彼女が最も強く感じていたのは、人々(社会関係)への帰属の弱さであった。職場の人間関係は「仕事だけの付き合い」であり、仕事のペースも自分自身で決めていかなければならない。そして地元に戻ってきて知り合いがおらず「すごい寂しかった」彼女は、地元で密着したキャリアプランに切り替えることによって、この状況を克服しようとする。こうした時期に出会ったストブレは彼女にとって、地元での社会関係への組み込みを促し、包摂感を与えてくれる場であった。「打ち合わせしてとか、課題与えられてとか、みんなで工作してとかそういうのがすごい楽しくって、その一年でけっこうハマってったところがあるかもしれない(ストブレは)みんなで何かをするっていう学園祭ノリみたいなところもちょっとあるじゃない。(みんなで)ああだこうだ言って、大人になってからそういう誰かに何かをやらされることってないじゃない。そういうことに飢えてたのかもしれない」。

発表会で提案したを上述の街歩きイベントは、翌年のストブレ事業として採用され、Dは会場となる地域の町会員やレストラン経営者と予算やランチに関する打ち合わせ、出演する地元ミュージシャンとライブに関する打ち合わせを進めていく。その傍ら、彼女はストブレメンバーを始めとする地元の人々と、新たな交遊関係を取り結んでいく。「(地元では)買い物してても誰かと会ったり、みんながどんな生活してるかだいたい見えるじゃない。昨日誰々ちゃんと遊んだとか、昨日どこどこでご飯食べたみたいな。地元の同級生みたいな感覚?人に対して。そういうのがここと得られた。東京で働いてた頃は刺激があって楽しかったんだけど、なんかそうじゃなくて、私には、ぬるま湯にこうずうっと浸かってる居心地のよさっていうか…」というDの語りからは、彼女が親密圏としての地元

に魅力を感じ、それに積極的にコミットしていく様子が伺われる。若者が親密圏としての地元を重視する背景には、社会の流動化や労働の不安定化による存在論的不安の高まりがあることが若者論では指摘されているが（土井2010）、フリーの立場で仕事をしていたDもそうした社会背景を共有する若者として捉えることができるだろう。

しかし一方で彼女は、上述のようにキャリアを切り開いていく場としても地元を捉えており、「柏レイソル」のイベントやケーブルテレビでの応援番組を受け持つアナウンサーとしての活動に取り組んでいく。若者論で言われる「地元志向」と、キャリア志向を一体化させた形で、地元への関わりを深めていくのである。

(2) 部会長としての取り組み

街歩きイベントを終えたDは、音楽が好きであったため、音街部会に入ること并希望し、そのメンバーとして活動を始める。ほどなく代表から「今の部会長がストブレをやめるから、次の部会長をやらないか」と声をかけられ、迷った末に引き受けることにする。部会長となったDは、多くの新企画を盛り込みながら地元ミュージシャンを巻き込んだライブステージを展開していく。「(それまでの)単発イベントじゃつまらないから、ストーリー性をつくって、ストリートミュージシャンを巻き込んでっていうことを考えていくんだけど」「(駅前の有名デパートから)ゴールデンウィークに何か一日イベントをやってくださいって丸投げしてくるから、企画書を私が書いていって。毎週小さいストリートライブをして、そこでの勝ち抜き戦で選ばれたミュージシャンが音街かしわのステージに出られますとか」。

このように音街かしわ部会は、地元の様々な立場（デパート、地元ミュージシャン、地元ライブハウスのバンド・音響等）との関係を取り結びながらイベントを立ち上げていく。その中でDが部会長として心がけていたことが結束力の維持だった。「他の部会の人々が音街部会を見た時に、この部会すげーって思ったみたい。結束力がなんかすごい。例えばメール、出席できますかとかってメールも、絵文字使ったり、ハート使ったり（中略）。で、出席の人は、来てね、出席とりま〜す、1番2番みたいな。ちょっと盛り上げて。部会の時に手づくりのお菓子もってったりとかして、食べて食べて、おなかすくでしょって。戦略的に。で、どンドンどンドン結束力が高まっていくわけ。そういうちょっとした気遣いみたいなもの。すごい雰囲気よくて」「〇〇ちゃんは新人だから、どうしていいか分かんないけど、やっぱ彼女も何かやりたくて来てる訳じゃん。で、音街かしわライブのポスターとかフライヤーとかを色んなとこに撒いてください、撒いたらLINEで報告してくださいって言ったの。そしたらもう、それが楽しくなっちゃって。色々なとこに行行って、店員さんに持ってもらった写真をLINEに載せる。そうするとみんなが〇〇ちゃんすごーってなるじゃん。たら本人もさ、悪い気しない訳じゃん。そうやってこう士気を高めてくっていうか」

Dは、部会メンバーから意見・アイデアを引き出していく工夫もしている。「全然あんまりお話できない大学生の〇〇ちゃんって女の子が、なんでストブレにいるの？ってぐらい声を発しない子とか（中略）、去年とかもアーティストをブッキングするのに、誰がいい？みたいなのを無理矢理振ると、なんか出てくるわけ。やっぱりさ、入ってくる子って、大人しくって存在感がなくても、何かをやりたいから、この街で何かを起こしたいから来てるから。だからやらせてあげると、すごい張り切ってやってくれて、私でさえちょっと行くのを躊躇するくらいの感じの（ブレイクしている歌手の事務所との交渉を）どーんとやってのけちゃったりするから。やっぱりそういう気持ちで入ってきてるのに、私には居場所がないとか、役割がないって思われたらかわいそうだなって思っ。やっぱりみんなの意見を聞いて、なるべく取り入れてあげて、役割を与えてあげたいなっていうのはある」。

(3) 様々な地域アクターとの関わり

ストブレにおけるDの活動は、月日を重ねるにつれ、ストブレの外に開かれたものとなっていく。ここでは二つの出来事を通して、そのプロセスを追っていきましょう。

地元アイドルグループの結成

2011年、Dは音街部会の活動として、地元アイドルグループの結成とプロデュースを構想する。「地元アイドルってあんまりパツとしないけど、今いろんな街にいっぱいいるじゃない。柏だったらもうちょっとパツとしたのができるんじゃないか、アイドルって形で華やかに柏を盛り上げて、PRしてくれる人がいるといいなってずっと思っていた」Dは、当時のストブレ代表に企画の相談をするが、「他の地域でやっている企画をしても面白くないし、継続的にプロデュースしていくことが難しい」と難色を示される。そこでDは、魅力的な企画の打ち出しと継続的なプロデュースを可能とするため、柏市出身の音楽プロデューサーA氏に協力を依頼する。柏レイソルにアナウンサーとして関わっていたDは、A氏が柏レイソルの応援ソングを手がけた際に歌手として参加したことがあり、その際のつながりを活かしたのである。その後Dは、A氏からの紹介を通して、柏市在住のモデルが多数所属する地元の広告会社に、アイドル候補者の紹介と広告プロデュースを依頼していく。ストブレ代表から企画に難色を示されたDは、「じゃあちょっと私のネットワークでっていう感じで、まわりを固めていく」ことにより、最終的に代表からの承認を得ることに成功する。

このような準備期間を通して音街部会のご当地アイドル選考コンテストを開催し、2012年に女性アイドルグループを、翌2013年には男性アイドルグループを結成させる。

結成後の活動のなかで、Dが一番に感じた困難は「(地元を応援する) 地元の

ご当地アイドルっていうコンセプトですって言うけど、ただ歌うだけとか、アイドルになりたいだけっていう子」がいるということであった。

Dは女性グループのメンバーたちに、ステージでのトークの仕方を教えたり、FMラジオに出演する機会を取りついたり、応援のための関わりを続けていくが、結成当初5名いたメンバーは、数年後2名となる。このことに関してDは「ただ歌うだけとか、アイドルになりたいって子は辞めていくんだよね。後から新しく入って辞めちゃった子も“なんでこんな地元の曲ばかり歌わなきゃいけないんですか”って言ってたんだって」と述べている。しかし女性グループに残った2名は「地元を盛り上げたって気持ちが強かった」ので、現在も柏を中心に活躍の場を広げている。Dは「さっき広告会社の人からメールがきて“Dさんがきっかけをつくってくれたことで、彼女たちは今年も柏を中心に色々な場所で活躍できました”って言われたんだよ。うれしいよね。」と語っている。

一方、男性グループの方は「なんか皆、自分が自分がなんだよね。僕はこんな踊りたくないとか、こういうキャラじゃないしとか言い出したりして。〇〇って子はシンガーソングライターなんだよね、だからアイドルなんかホントはやりたくないんだけど自分の名前を売るために来たのか、やる気がないわけ。みんなやる気がなくて、柏、地元への思いもないしバラバラだし。相談の受けたりはしてたんだけど、あまりにもみんなが勝手すぎてどうにもならない。“うまくいかないんです。僕、新しい曲つくったんで聞いてください”みたいな」という状況にあり、Dは「みんなやりたいことが色々あるんだから、無理してまともになくても、シンガーソングライターとして都内でライブやりたいとか、そっちを応援してあげる」という心境に至り、現在、男性グループへの活動サポートは行っていないという。

まちづくり公社との話し合い

2015年、音街部会は、音街かしわライブの開催に併せて、会場となる駅前広場で物販活動も行うという取り組みに着手する。ダブルデッキはあらゆる販売活動が禁止されているエリアであるが、この場所の賑わいづくりや回遊性の向上を模索する柏市まちづくり公社からの要請により、「社会実験事業」として行う運びとなったのである。

まちづくり公社からこの要請を受け、音街部会は、上述の“手づくりでの市(手づくり雑貨やフードを制作者自身が販売する市)”や“ジモトワカゾー野菜市(若手農家自身が野菜を販売する市)”の開催と、音楽関係者が提供する商品の販売ブースを企画する。

準備の過程でDは「社会実験事業」の進め方について、まちづくり公社と何度も話し合う機会を設けてきた。Dは当初、音楽関係者の商品は、柏市民が提供するものに限定せずに販売することを考えていた。これに対してまちづくり公社は、取り扱う商品は柏市民が提供するものに限定した方がよいという見解を示

す。この見解の相違は、双方の社会的立場の違いに起因している。Dは市民活動団体のメンバーとして、本稿第2節で示した“公共性”の構成要件「(活動の)公開性と接近への非制限性(滝川2006)」を重視するスタンスにあり、多様な人々が参加できる開放的な販売形態を確保することで駅前広場の集客力を高め、中心市街地活性化に寄与したいという考え方を有していた。一方のまちづくり公社は、「市内在住者の優先」を原則とする地方自治体に準じた立場にあり、「柏市民に対する」販売機会の提供を通して、中心市街地活性化を図っていくべきという考え方を有している。両者は話し合いの末、今年度は、まちづくり公社が提案した形態に沿う形で社会実験を行うことにする。Dとまちづくり公社は「中心市街地活性化」という目標の共有はしているが、社会的立場を異にしているため、協働にあたっての調整作業が必要になったのである。

Dは、この話し合いとイベント当日のことを振り返り、「壁があったから(イベントが)終わった後の達成感はやっぱりすごかったよね。当日は公社の人もね、ステージの前に集まってノリノリになってたの。私としてはそうやって楽しんでくれたっていうかさ。そうだからやりがいの部分っていうか、よろこびっていうかは、めんどくさいことが多かった分、うん。(大きかった)」と語っている。

6. Dにとっての「公共財の創出」

前節ではストブレに入ってからからのDの活動プロセスを追ってきたが、本節では、彼女が街の公共財としての「中心市街地活性化」に関わる事業(音街かしわライブ・物販の社会的実験)の意義をどのように意味づけているのか、それほどどのように変化していくのかを考察する。

(1) 対面性・固有性を通して感受される意義

Dにとっての中心市街地活性化の意義は、実際に目の前にいる人が喜んでくれるというミクロな相互作用の中から感受されるものである。それは、Dが地元アイドルが所属する会社からの感謝の言葉をかけられたことや、まちづくり公社の職員がライブを楽しんでいたことに遣り甲斐を感じた、ということから確認できる。さらに、彼女の以下のような発言からも確認することができる。「(音街かしわライブに)来た人とか、出演した人がすごくいいイベントだったとか、すごい楽しかったとか言ってくれら場もうそれで超満足」「(音街かしわライブに出演した)地元のスウィングバンドの人と話をしたんだけど、メンバーがみんな“舞台からは、駅から集まって来る人たちが見えて、ほんっとに最高だった”って言ってたんだって。もうほんっとよかったなあとと思って」「ダブルデッキに人がわ～って集まって、その歌をみんなで歌ってるのを一番後ろから見るのが好き」

中心市街地を活性化していくためには当該エリアに統一された空間的意味を付与し、それを通して市民の地域アイデンティティを醸成していくことが重要とさ

れているが、その重要性も彼女は聴衆との具体的相互作用を通して掴み取っている。毎年の音街かしわライブには、千葉県出身の有名ミュージシャンがヒット曲を披露するという企画がある。これを恒例としているのにはDの「柏と言えばというアイコンじゃないけど、ダブルデッキで彼がああ曲を歌いますっていうので、ああ柏だなんて感じてもらいたい。」というこだわりがある。そのこだわりは、転職のため名古屋に引っ越した音街部会のメンバーが、音街かしわライブを観に毎年戻ってくることで、そして「このイベントに来て、あの曲を聴くとホームに帰ってきたっていう気がする」と言っていたことから生まれたという。Dはその言葉から「ほんとに柏を示すものである駅前ダブルデッキ」で、音街かしわライブを開催し、そのヒット曲を披露することが「音楽の街」という中心市街地への空間的意味付与を達成し、市民の地域アイデンティティの醸成につながっていくことを掴んでいったものと考えられる。

ここからは、公共財を自身のリアリティを超えた社会的水準で捉え、その形成のために目の前の人々との相互行為を展開していく、というベクトルではなく、まず目の前にいる人々との相互作用があり、それらの人々が喜んでくれる事象を「公共財」として意味づけていくというベクトルを見いだすことができる。

(2) 外部との関わりを通して形成される「公共性」

しかし、ストブレ外の多様な人々と社会関係を取り結んでいく過程でDには、自身が取り結ぶミクロな相互関係への着目を越え、中心市街地エリアを一つの有機的ネットワークとして捉える視点が生まれている。Dは、これまでの活動を以下のように振り返る。「始める前はあんまり知り合いがいなかったけど、ストブレ入って友達もできたし、柏の街を動かしている主要なメンバーを知れた。友達ができたのと、街をちょっと動かしてる感はあるからさ。その中に入れたっていう。この街を活性化する何かに関わってる訳じゃない。すごい動かしてる人たちと一緒に一員となって。」「街の仕組みが分かるじゃん。イベントが行われます、ストブレが関わってます、商工会議所がやってます、とか。ただ今日こんなイベントやってんだなって通り過ぎるんじゃないって、その仕組みが分かることで、そこに入っていけるし、そこの人たちを関われるから。人と人のつながりができてくる。色んなことをこの街でやって、仕組みの中の一つとしてやって。愛着がわくよね。生活してるだけじゃない訳だから」「(ストブレに入って)私は柏にずっと住んでたのに知らないことがいっぱいあると思ったわけ。いたくせにこの街のこと全然知らない。で、なんか(ストブレを始めて)色々みんながやろうとしてる、盛り上げようとしてるっていうのは見えるけど、なんか違うみたい。みんなバラバラに盛り上げようとしてる。(筆者：じゃあ、もっとつながってほしいのになあみたい?) うん、そうそう。」

Dはこのように街の社会関係を俯瞰する視野の広がりを経験していくと同時に、街に存在する立場や志向性の異なる人々(例えば地元アイドルグループのメ

ンバーや、まちづくり公社の職員)との実際の社会関係も形成していく。そして、そのプロセスにおいて「自分の目の前の人に喜んでほしい」というミクロな相互作用への着目を越え、地域社会全体を捉える語彙が持ちだされていく。例えばDは筆者に、地元アイドルグループのメンバーには「地元を盛り上げたいって気持ち」が必要である、という言葉述べている。また社会実験事業に関する話し合いの中で、まちづくり公社の職員に「(駅前)人を呼びたいんですね」という言葉を伝えている。またDは出産後、「子どもがほんとよく泣く子で、ご飯も食べられない」という状況になったため、「ゆっくりご飯を食べられる場をつくりたい」という思いから、ストブレメンバーが立ち上げたコミュニティカフェで、母親の集いの場(ママカフェ)を開催するようになる。コミュニティカフェを運営するストブレメンバーに企画書の提出を求められた際、自身のニーズに基づく動機を変換させ「この街には母親が集まれる場所が少ないので、そのような場をつくりたい」という表現を用いている。これらの言葉は柏市や中心市街地全体を視野に入れた上で、その中に自分の活動の社会的意義や目的を定位させようとする言葉である。そしてこれらは、ストブレ外部に存在する立場や志向性の異なる人々との関わりの中で、必要に応じて紡ぎ出されたものである¹。

こうした語彙を用いることと並行して、Dが感じるストブレ活動の意義も広く一般性を有するものになっていく。音街かしわライブの遣り甲斐に関して、彼女は以下のようにも述べている。「みんなが一瞬でもこの街いいなあとか、一瞬でも喜んで、なんかそういうのってベタだけど、明日もがんばろうとかさ、一週間後に思いだした時、あの時楽しかったなとかさ、ダブルデッキをなんでもない日歩いて、あん時おもしろかったなとかさ、柏でこの辺を歩いててね、そういうことを思いだしてくれて、ちょっとあったかくなるっていう(ことに意義を感じている)」。ここからは、Dが「実際に目の前にいる人が喜んでいる」という対面性・固有性に依拠した意義を感じているだけでなく、「不特定多数の人に喜んでもらう機会を提供する」という非人称的な意義を感じていることが理解できる。

Dの歩みからは「異質な他者と関係を取り結ぶ」というコミュニケーション様式としての「公共性」を積み重ねることを通して、「新たな公共」という社会的仕組みとしての「公共性」に関与していくための視点・メンタリティが醸成されていくプロセスが見出せるのである。

6. おわりに —— 本事例が示唆していること

ここまでDの語りを通して、彼女がストブレ内外の人々との関係性を広げながら「中心市街地活性化」という公共財を自分なりに意味づけていくプロセスを見てきた。一人の若者の事例分析から一般化された知見を述べることは不可能で

あるが、本事例を“(二つの水準の)公共性の形成に関わる若者の今日的なあり様を体現している1ケース”として捉えることはできるだろう。ここではそれがどのような特徴を持つものであるのかを、浅野(2011)と仁平(2011)の議論を補助線に考えてみたい。

まずは、Dが体現しているコミュニケーション様式としての「公共性」の特徴を、浅野の議論を参照しながら考えたい。本稿の第2節で概観した通り、浅野はこの水準の「公共性」を検討するために、趣味集団を題材とした漫画の内容分析を行い、メンバーたちが互いの異質性を乗り越えていくプロセスを紹介している。このプロセスにおいては、メンバーたちが一様に趣味への強い愛着を持ち、対等な関係を築いていることが前提とされている。

しかし本事例からは、メンバーたちが「つきあいの作法」としての公共性を発揮していくプロセスには、部会長としてのDの強いリーダーシップを発揮していることが見出せた。音街部会は、音楽の好きな若者が多く集まる部会であり、趣味集団と親和性の高い部会として捉えることができる。しかし、この部会に入った当初のメンバーは、本稿第5節で見たとおり「どうしていいか分かんないけど、何かやりたくて来ている」という漠然とした状態にある。部会長としての経験と社会関係資本を中心的に保有するDが、そのような彼らに「役割」を与え、その後の道筋をつけていくことにより初めて彼らは、つきあい方の作法としての「公共性」を発揮していける場を見出しているのである。

またDのリーダーシップのあり様は、音街部会のミーティングで、親密性(他者の同質的な側面に着目し、共感しあいながら展開させるつきあい方の作法)と公共性(親しい関係を超えて、問題の解決に利害や関心をもつという以外の共通点が必ずしもない人々の間に協力関係を組織していくようなつきあい方の作法(浅野2011:10-11))とを融合させているという点で特徴的である。メールでの「仲よし感」の演出や、手作りのお菓子で場を和ませるという「戦略」は、葛藤や対立を乗り越えるための作法というよりは、それらを顕在化させない作法として機能している。また彼女は、新たなメンバーが「居場所がない」という感覚を抱かないよう常に気配りをしている。しかしそれは、音街部会のメンバーたちが「仲よし関係」に留まり、部会外部の人間関係に接続されていけないという結果をもたらしてはいない。

浅野は集団内で相互作用を通して、若者たちが公共的な作法を体得していくことを示唆しているが、それには、今日的な方法で活動を牽引していくリーダーの存在が重要であることを本事例は示唆しているのである。

次に、Dが体現しているマクロな社会的仕組みの水準における「公共性」への参加プロセスにおける特徴を仁平の議論(2011)を参照しながら考察する。

仁平はボランティアに関する歴史分析を通して、社会的弱者の置かれている構造的な問題を政治的に改善していくための運動を重視する<政治・運動>の意味論が70年代以降、後景化していき、担い手にとっての楽しさ(生きている充実感、

友達ができる、自己実現等々)を重視し、他者不在の構造をもつ自己効用論的な言説が席捲していく歴史的経緯を明らかにしている。そして、若者たちが語る「活動の意義」も、当事者のリアリティや相互作用を超えた「社会」を見据え、＜政治・運動＞の意味論上に捉えていく、というのではなく、＜自己効用＞的な意味論で捉えるものに変化している様子が示されている。

また仁平は、60年代の若者たちが＜政治・運動＞の意味論に結びつける形でボランティア活動を行っていた社会的背景として、「反抗する若者」という学生運動と連動する若者イメージが一般に流通しており、活動を行う若者の間にも、学生運動と自分たちの活動に連続性を見出そうという思いが存在していたことを挙げている(仁平2011:229)。そして、80年代から席捲していく「社会的意義ではなく、(自己効用的な)楽しさや面白さに従って自由に活動する」というボランティア活動の動機は、「楽しさ」を強調する当時の時代的精神を反映したものであったと述べる(仁平2011:332-335)。

Dの語りにおいても、活動に対する自己効用論的な意味づけと充足感は確認することができる。しかしDの語りそのものが、他者不在の構造を持ち「社会」を見据えていないとして捉えるのは的確ではない。例えばDは、メンバーからの「ホームに帰ってきたって気がする」という言葉かけや、ライブに来た人が喜んでくれているというミクロな相互作用を積み重ねにより、「中心市街地活性化」という都市政策課題を自分なりに捉え、それに対するアプローチを考案するようになっていく。(他のメンバーへのインタビューからも中心市街地活性化という団体目標は活動をしている中で「肌感覚」で捉え、問題として意識するようになったという発言を複数得ている)

ここからは上述の通り、「社会」をまず自身のリアリティを超えた水準で捉え、その改善のために目の前の人々との相互行為を展開していくというベクトルではなく、目の前にいる人々との相互作用がまずあり、活動を継続していくなかで、それらの人々が相互作用を展開する場としての「社会」を、さらにはそれらの人々を越える非人称的な人々の集まりとしての「社会」を想定するようになっていき、それにアプローチしていくというベクトルが見出せる。

現在の若者は、1960年代の若者が共有していた「反抗する若者」という文化的コンテクストを共有していないため、自身の活動を＜政治・運動＞の意味論にすぐにつなげようとする志向性は持たない。一方で、バブル経済を背景とし、自己効用的な「楽しさ」を明るく求めていく「リベラリズムの楽園(仁平2011:357)」に身をおいているわけでもない。土井が「不満の時代から不安の時代へ」と述べているように、彼らは、価値観が多様化し、何を拠り所に生きていったらいいのか分からない不安から、自己評価の判断材料としての「人間関係」に依存せざるを得ない社会状況におかれている(土井2010:104-107)。

そうした状況下において、若者が同質的な人間関係から得られる存在論的安心に固執し続ければ、そこからは、他者や社会の不在といった自己効用論的な問題

が浮上してくるだろう。しかしDがストブレと出会ったように、多様性に関われた人間関係に接触し、視野を広げていける集団に出会うことができれば、若者は地元において「新しい公共」という他者と社会が存在する仕組みに参加していくことができる。人間関係への関心と依存度が高い分、60年代の若者とは異なり、目の前にある人間関係から出発していく地に足のついたプロセスを経て、「公共性」への参加を達成していく可能性があることをこの事例は示唆している。

注

- (1) 2007年に青年文化研究会が実施したアンケート調査。東京都杉並区在住の16歳から29歳の男女対象。趣味集団への所属は、支払経由型の政治参加とプラスに関係していること、複数の集団への所属は、「意見表明型の政治参加」および「支払経由型政治参加」と、また政治的な会話の相手数とプラスに関係していることを明らかにしている。（「支払経由型の政治参加」は、買い物や募金等、お金の支払をとおして間接的に参加しようとする方向性の政治参加、「意見表明型の政治参加」は、意見を表明したり、デモに参加したり等、自分自身の意見や意志を直接表明しようとする方向性の政治参加を指している。）（浅野2011：105-115）
- (2) 柏市中心市街地活性化基本計画
URL http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/090700/p005660_d/fil/tw_plan.pdf
- (3) 柏マイスター塾とは、柏市の歴史や商業に関する学習会や既存のストブレイベントへの参加などを行う1年間のプログラムで、受講者は卒業制作として中心市街地活性化に向けたイベントの企画発表を行い「柏マイスター」の称号を得るというものである。
- (4) Dは、地元を拠点としてフリーアナウンサーをしようと考えていた当手を振り返り、「自分がしゃべる仕事してて、少しでも何かを引っ張ったりとか、力を貸せるような立場にいるんだから、やるんだったらここでやらないと」という思いを持っていたと述べているが、当時のDは、中心市街地エリアを一つの有機的ネットワークとして捉える視点や、立場の異なる人との交渉経験も持っていない。よって、当時のDが抱いていた社会貢献志向は抽象的・理念的な水準に留まっていると解釈することができる。本稿では、Dが地域課題（中心市街地活性化）を自身の生活世界に即して意味づけていき、当初の思いが具体的・経験的な水準に移行していくプロセスに焦点を当てている。

文献

- 浅野智彦 2011 『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店
阿部真大 2013 『地方にこもる若者たち』朝日新聞出版
新谷周平 2010 「新しい「階級」文化への接続－「動物化」するわれわれは「社

- 会」をつくっていけるのか？」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在－労働』日本図書センター149-184
- 石原武政 2006 『小売業の外部性とまちづくり』有斐閣
- 鈴木謙介 2008 『サブカル・ニッポンの新自由主義』筑摩書房
- 宗田好史 2014 「中心市街地の衰退と再生」近畿都市学会編『都市構造と都市政策』古今書院84-91
- 2007 『中心市街地の想像力』学芸出版社
- 滝澤利行 2006 「市民と行政の協働に関わる主体性と関係性－「新しい公共性」を市民のものとするために－」『NPOと行政のパートナーシップは成り立つか!?－協働を形にする「事業協働契約」を考える』1-12 東京ボランティア・市民活動センター
- 田中重好 2010 『地域社会から生まれる公共性－公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房
- 土井隆義 2006 「地元つながり、ネットつながり－鏡像化した人間関係の鳥宇宙」筑波大学社会学研究室『社会学ジャーナル』第31号 23-50
- 土井隆義 2010 「地方の空洞化と若者の地元志向－フラット化する日常空間のアイロニー」筑波大学社会学研究室『社会学ジャーナル』第35号97-108
- 濱田恵三 2011 『まちづくりの論理と実践』創成社
- 仁平典宏 2011 『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会
- 樋口明彦 2006 「若者の「自立」を解体する－多元的社会的包摂の試み」『現代思想』34：124-136
- 古市憲寿 2011 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社